

各 位

令和2年7月15日
山形市野草園 : 山形市大字神尾 832-3
電話 023-634-4120

山形市野草園からのお知らせ



百合の女王 《ヤマユリ》

ヤマユリ（ユリ科）

本州中部から北の山地に生える日本固有種の多年草です。茎の高さは1～1.5mで直立していますが、花径が20cmもある大形の花を茎の上に数個つけるので、その重みによって少し倒れることさえあります。6個の花被片は白く、真ん中に黄色い筋が入り赤褐色のたくさんの斑点があります。雄しべの葯は赤くて目立ち、また、花には強い芳香があります。

梅雨明けが待ち遠しい今日この頃、ヤマユリの蕾が大きく膨らんできました。7月下旬の野草園は、約300株ほどのヤマユリの優雅な姿でいっぱいになり、何とも言えない芳香に包まれます。その清楚な美しさと甘い香りは、訪れた人たちを魅了します。

白色のヤマユリだけでなく、橙色のクルマユリ、コオニユリ、オニユリも間もなく開花を迎え、夏の野草園に鮮やかな彩をもたらします。

木陰を歩きながらひっそりと優しく咲く野の花を愛でるひと時、みなさんにとって心の休息の時間となることでしょう。いこいとやすらぎの場、「山形市野草園」に足を運んでみませんか。お待ちしております。

《 開園時間短縮のお知らせ 》

6月1日～8月31日は午前9時から午後6時まで開園予定でしたが、新型コロナウイルス感染症対策及びクマ侵入に備えた安全確保のために、午前9時から午後4時30分までの開園時間とします。尚、入園は午後4時までです。

※9月以降の開園時間も午前9時から午後4時30分となります。

- ◆ 「自然学習センター」と「カフェやまぼうし」は7月2日から再開しています。換気や人が触れる物のアルコール消毒を十分におこなっていきます。また、テーブル、イスを減らし、十分な間隔を取れるようにしています。

来園前にホームページ又はお電話でご確認ください。

(<https://www.yasouen.jp>) (023-634-4120)

●●●7月後半に見られる主な花●●●



メタカラコウ (キク科)

深山の湿地に生える多年草で、茎は直立して枝分かれしません。葉には長い柄があり、三角状心形です。茎の先に黄色い花を総状につけ、花は数枚の舌状花があり、中央に筒状花が集まっています。雄タカラコウよりもやさしいつくりであることが雌タカラコウの名の由来です。



ヤナギラン(アカバナ科)

山地の日当たりのよいところに生える、高さ50～150cmの多年草です。茎は直立して枝分かれせず、葉は互生し披針形で葉柄がなく裏面はやや白色を帯びています。茎の先に多数の紅紫色の花を開き、だんだん下から上へ咲き上がります。花が美しい蘭に、葉が柳に似ていることが名の由来です。



ククイモモドキ(キク科)

日当たりの良い所に生育する多年草です。草丈1m程で、花は黄色の舌状花と筒状花からなり、まるで小さなヒマワリのようなです。ククイモ(菊芋)によく似ていることが名前の由来です。ククイモ《モドキ》ですので、根茎の先に芋はできません。



オカトラノオ(サクラソウ科)

山地や丘陵の日当たりのよい草地に生える多年草です。茎は直立し、ほとんど枝分かれせず基部は紅色を帯びます。葉は互生し短い柄があり長楕円状披針形です。茎の頂きに、多数の小さな白い花を密につけます。丘によく見られ、花穂がトラの尾に似ることが名前の由来です。



サボンソウ(ナデシコ科)

ヨーロッパ原産で、明治時代に入ってきた多年草です。葉は対生し、長楕円状披針形です。枝の先に淡紅色または白色の花を集めてつけます。葉を水に浸すと石鹼と同様の作用があり、かつては代用品として使われました。しかし、有毒ですので口には入れていけません。サポニンを多く含んでいることが、名前の由来です。



カライトソウ(バラ科)

山の草原に自生し草丈は1 m程です。葉は楕円形で、縁に波形のギザギザが入ります。穂状の花は先端から根元に向かって咲き、花弁はありません。雄しべが紅紫色で長く、花の外に突出したような感じになります。雄しべを唐糸(絹)に見立てたことが名前の由来です。



チダケサシ(ユキノシタ科)

やや湿った山野に生える多年草です。葉は2~3回羽状複葉で、小葉は楕円形または倒卵形です。縁には不ぞろいの鋸歯があります。花茎の先に淡紅色や白色の小さな花を多数つけます。チダケ(乳茸：傷をつけると白色の乳液を分泌する食用キノコ)を採ると、この草の茎に刺して持ち帰ったことが名前の由来です。



クサキョウチクトウ(ハナシノブ科)

北アメリカ原産の多年草で、葉は対生しますが、時には3枚輪生します。葉柄はごく短く、いくぶん茎を抱くようになります。茎頂に紅紫色の花を多数つけます。花は下部が細い筒となり、上部は花弁が5裂して平らに開き、回旋してひだ状に重なります。草本ですが、花が木本キョウチクトウに似ていることが名前の由来です。



アジサイ（アジサイ科） 《別名：ホンアジサイ》

アジサイはアジサイ属の一部の総称とされ、他と区別するために「ホンアジサイ」と呼ばれることがあります。たくさんの花の集まりは、手毬咲きと呼ばれます。ひとつひとつの花は雄しべや雌しべのない装飾花で、ガクアジサイの突然変異種です。装飾花だけで種ができないので挿し木で増やします。



ガクアジサイ（アジサイ科）

暖かい地方の山地などに生える背丈2m程の落葉低木です。葉は長卵形で厚く、茎先に大形の花序を付けます。中心部に小さい青色の両性花が密集します。周りは萼片が変化した4枚の白い装飾花で、それが額縁のように見えることが名前の由来です。



ネムノキ（マメ科）

山地や原野、川岸などに生える落葉高木です。夜になると小葉が眠るように閉じます。枝先に10～20個の紅色の花を散形状につけます。花は花弁が合体し、上部だけが5片に分かれ、淡紅色のたくさんの長い雄しべが目立ちます。雌しべは白色の糸状で雄しべより少し長いようです。



カワラナデシコ（ナデシコ科）

各地の山野に自生する多年生草本です。葉は対生し、線形または披針形で、基部は茎を少し抱きます。花茎の先に咲く淡紅紫色の花は花弁の先が細かく裂けて優美です。秋の七草のひとつに数えられていますが、7月には咲き始めます。河原に生える可憐な花の様子が名前の由来です。



ヒヨドリバナ（キク科）

山野に生える多年草で、草丈が1～2mになり、葉は短柄で対生します。茎先に散房状に多数の白色の花を付けます。まれに薄い紅色を帯びる時もあります。花は筒状花だけの集まりで、雌しべの花柱が2つに分かれて長く伸びています。ヒヨドリが鳴く頃に花が咲くことが名前の由来といわれています。



キキョウ (キキョウ科)

日当たりのよい山地や野原などに生える多年草です。根は太く黄白色をしており薬用とされています。葉は長卵形で先は尖り、縁には鋸歯があります。茎の上部に青紫色の鐘形5裂の花を開きます。秋の七草というアサガオはキキョウのことだといわれています。



リョウブ (リョウブ科)

山林の中に生える落葉の小高木で、樹皮は薄片となつてはがれ、残りは茶褐色でなめらかです。葉は枝先に集まって互生し広い倒披針形です。枝先に小さな白い花を密につけます。木肌がきれいなので、薄片をつけたまま床柱として使われました。昔、若い葉を保存しておき、救援食物としても使われたようです。



ヤブカンゾウ (ワスレグサ科)

野原などの日当たりの良い所に生える多年草です。葉は広線形、鮮緑色で先は下垂しています。若葉はおいしい山菜のひとつです。葉の間から花茎を出して上部に黄赤色の花を数個つけます。雄しべや雌しべは花卉のようになり、八重咲きに見えます。果実はできず、根茎から横につるを出して繁殖します。



オニユリ(ユリ科)

茎の頂に、径10～12cmの朱色の花を数個つけます。花被片は、赤橙色で暗紫色の斑点が多数あり、強く反り返ります。長い雄しべと葯の紫色も目立ちますが、それ以上に葉の基部に付くムカゴ(零余子)が目立ち、他のものと見分ける大きな特徴になります。花の色が鬼を思わせることが名前の由来です。



クルマユリ (ユリ科)

本州中部以北の亜高山帯の草原に生える多年草です。葉は茎の中央部付近に6～15枚が輪生し、その上部に3～4枚がまばらにつきます。茎の先に黄赤色の花をつけ、花は下を向きます。花卉はせまい披針形で広く基部から開いてそり返ります。葉が放射状についている様子を車輪にたとえたことが名前の由来です。